

分析化学の更なる地位向上をめざして

寺 部 茂

ここ数年、日本分析化学会を取り巻く情勢が急激に変化している。平成16年度から文部科学省による「戦略的先端計測分析技術・機器開発」プロジェクトが発足することになった。分析化学が中心となる初めての大型プロジェクトであり、分析化学の新展開にとってはまたとない好機である。ここでは触れないが、学会の運営を巡る条件も大きく変化している。思いもかけず平成2004年度会長を務めさせていただくことになり、何ができるのか考えてみたい。とは言え、任期は1年で、以前は学会運営には疎い立場にいたので、何も成果があげられぬまま任期が終わってしまうのではないかと恐れる。

日本分析化学会にとって最大の関心事である分析化学の地位向上については、過去にも真剣に議論されているが、めざましい成果は得られていない。田中耕一名誉会員のノーベル化学賞受賞は分析化学関係者に大きな励みを与えている。社会の関心が分析化学に向いている時に、さらに分析化学の存在感を増すことが、分析化学の地位向上に重要である。ノーベル賞にまで届かなくても分析化学分野から学問的に大きな成果を示すことが必要であろう。分析化学は多くの学問分野、産業において研究、製品開発、生産管理等に必須の手段として利用されているので、学問的成果が他の分野に貢献する機会が多い。上述の文科省プロジェクトでは、最先端の分析技術・機器開発が求められている。このようなプロジェクトで分析化学者が中心となって立派な成果をあげることが強く期待される。このことが、分析化学の地位向上に何より大きく貢献すると思われる。そのために、本会に活躍の足場をおいた会員諸氏のご健闘を強く期待したい。学会としては、会員諸氏がこのプロジェクトで活躍できるように支援する活動を行いたい。

日本分析化学会は分析化学というキーワードで、広い分野を横断的に組織した学会で、産業界からの会員が半数を占めるといった学術団体としては特色のある存在である。多くの会員が本会とは別に、それぞれ専門学会にも加入されていると思われる。本会会員の中には、大学の分析化学研究室で基礎研究を目的としている方から、分析化学を開発または生産に必須の計測手段として利用されている方まで、多様な方々がおられるであろう。このような会員の共通の目的は優れた分析法の開発とその普及であろう。基礎研究では新しい分析原理の発見、新しい計測法の開発、分析対象に適した計測手段の開発等が目的であり、分析化学を手段として利用する立場からは、各自の分析目的に適した分析法の開発とその分析法の効率的な実施が目的であろう。多くの場合、分析法に対するニーズがあり、そのために、新しい分析法の開発または既存の分析法の改良が行われている。そのために、学会が研究情報交換の場を提供することと会員相互の交流を促進することは当然であり、このことは定款に述べられている。学会活動としては、会員のために各種の事業を行うことが最重要であり、常に事業の見直しや新しい事業を立案していくことが学会の活性化に必須である。

分析化学の発展のためには、優れた分析機器の開発も必須である。今回の文科省プロジェクトでは、機器メーカーとの共同開発が求められている。本会には産業界からの会員が多いが、

多くの会員は分析化学を利用する立場の人で、機器開発や製造に関与している会員は多くないと思われる。機器開発・製作に直接関与している会社の団体として日本分析機器工業会(JAIMA)があり、今回の文科省プロジェクトの立案にはJAIMAの貢献が大きい。2003年度からJAIMA主催の分析展に併設で、本会主催の東京コンファレンスが開催されている。東京コンファレンスはまだ始まったばかりであるが、2004年度中には、年会、討論会とは異なる明確な位置づけを行う予定である。東京コンファレンスがJAIMAとの交流を深める一歩となればと考えている。産学協同に批判的な時期があったこともあり、本会とJAIMAとの交流は少なかった。今は産学交流が推奨される時代であり、文科省プロジェクトの関係もあり、両者の交流を緊密にすることが必要である。JAIMA会員の間からは、大学において分析機器開発研究に従事している研究者数の減少に危機感が述べられている。分析機器メーカーの最先端機器開発を支援するためにも、東京コンファレンス以外にも交流の機会を設けていくことを検討したい。両者の緊密な協力が分析化学の地位向上に役立つと確信している。他の関連学協会との交流を広めていくよう努力したい。

本会は会員相互間の交流は盛んであるが、他の分野からは中がよく見えないとの意見も聞く。本会会員ではないが、分析化学に多少とも興味を持っている人に本会の活動内容が見えないか、本会の存在が知られていないのではないかとと思う。現会員数は約8400名でかなり大規模な学会であるが、分析化学に直接かかわっている研究者、技術者の数のみでもこの数倍には達すると予想される。このような人達に本会に加入していただき、分析化学の地位向上に寄与していただくためには、学会に加入することのメリットを大きくすることが必須であろう。年会や討論会等の主催行事に参加する機会の少ない人にとっては、機関誌「ぶんせき」の中に興味ある記事が多ければ加入希望者は多くなると期待される。このことは以前から編集委員会で真剣に議論されてきたことであるが、さらに従来の範囲を超えた内容を加えていくことも必要ではないかと思われる。「ぶんせき」の記事はどれも学問的価値が高く、その分野に関心の高い読者には有益であるのは間違いないが、分野が少し離れると多くの記事は理解するのが難しいか、読む意欲をそそられないと言われる。会員が分野横断的な広い範囲に所属していることを考えると、気楽に読める記事をもう少し多くしてもよいのではと思われる。たとえば、JAIMAの機関誌と関連記事を相互掲載するのも一案ではと思う。

急な実現は難しいと思われるが、「先端分析機器開発センター」(仮称)の設置を広く訴えていきたい。今回の文科省プロジェクトにも関係するが、先端分析機器の開発は大学の研究室や、機器メーカー一社で行うのは困難である。先端分析機器開発の成功が関連分野の革新的展開に大きく影響する時代であるから、単に分析化学者のためのセンターというよりは、日本における学問的成果が世界の学問を先導するために必須のセンターとなることを訴えていきたい。